

平成 21 年 6 月 20 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19720177
 研究課題名（和文） 幕末維新期の地域社会の動向と明治維新の地域史的意義に関する研究
 研究課題名（英文） The study about the community of the late Tokugawa period revolution period and the local historic significance of the Meiji Restoration
 研究代表者 日比野 利信（HIBINO TOSHINOBU）
 北九州市立自然史・歴史博物館・学芸員
 研究者番号：90372234

研究成果の概要：

明治維新とは、地域社会の人びとにとってどのような体験であり、どのような意味を持ったか、小倉藩（領）を事例として、城下町の構造とその変化、長州戦争や戊辰戦争への動員・参加を中心に検討した。後者については、そのような体験がどのように語られ、記憶されたかという問題に主眼を置いた。小倉城自焼、藩士退却、藩庁移転という「敗戦」の記憶を、幕府に対する「尽忠」の物語によって克服しようとしたことが具体的に明らかになった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	500,000	0	500,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	150,000	1,150,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：近現代史、明治維新、地域社会、小倉藩、城下町、記憶

1. 研究開始当初の背景

豊富な明治維新研究にあって、明治維新が地域の人びとにとってどのような意味を持ったかということについては、これまであまり議論されてこなかった。地域社会にとって明治維新とは何だったか考えるためには、幕末維新期の地域社会の動向や人びとのさまざまな体験について、できるだけ詳細に明らかにしていくとともに、明治以降、そのような体験がどのように語られ、記憶されていったのか歴史意識の形成に関わる問題についても検討していくことが不可欠である。

すでに、研究代表者は地域社会で明治維新

がどのように語られ、記憶されたか、筑前福岡藩を事例に研究を行っている。福岡藩の場合、幕末薩摩藩・長州藩と並ぶ活躍を見せながら「乙丑の獄」と呼ばれる勤王派弾圧事件によって政局から後退した。それに関して明治以降、旧福岡藩では、幕末の活躍を「五卿送迎」「征長解兵」「薩長和解」を実現して、明治維新の「起源」を築いたとする語りや創造され、薩長藩閥に対するコンプレックスが論理的に克服されたことを明らかにした。

今後はさらに他藩・他地域の事例を併せて考えるとともに、記憶の問題だけでなく、ひとびとが明治維新をどのように体験したか、

さまざまな観点から研究を行う必要がある。

2. 研究の目的

本研究が事例とする豊前小倉藩は、長州戦争では幕府軍の中心として長州藩と戦って敗れ、城を焼いて香春～豊津に逃れて藩庁を設置し、そのまま明治維新を迎えた。一方、小倉城下町と企救郡一体を長州藩に占領され、領民の激しい一揆が起こった。また、戊辰戦争では新政府軍として東北諸藩軍と戦った。

本研究は、明治維新において他藩や他地域には見られない独自の体験を有する豊前小倉藩を事例として、下記の3つのテーマについて研究を行い、小倉藩士民・社会にとって明治維新とはどのような意味を持つ出来事だったか問い直すものである。

- (1) 幕末の異国船来航、尊皇攘夷運動、長州戦争、百姓一揆、戊辰戦争、廃藩置県、土族反乱、屯田兵（北海道開拓）などに小倉藩士民がどのように関わったか。
- (2) 長州戦争を中心に、旧小倉藩で明治維新はどのように語られ、記憶されて、どのような歴史意識が形成されていったか。また、そのような歴史意識がどのような作用をおよぼしたか。
- (3) 城を焼いて退去し、藩庁が別の地に移った小倉の都市空間はどのように変化したのか。明治以降、どのような主体によってどのようにして近代都市が形成されていったか。

3. 研究の方法

上記の3テーマに即して、下記の方法により研究を行う。

- (1) 小倉藩および関係諸藩の藩・町・村の記録資料について博学的に調査を行い、幕末維新期の小倉藩士民・社会の動向について、長州戦争などの出来事にどのように関わり、どのような体験をしたか明らかにする。
- (2) 上記の記録資料と、明治以降の編纂資料の双方を照合し、後者については、書誌学の方法も採り入れて、幕末維新期の出来事や体験がどのように記憶され、語られたか、史実と記憶はどのような関係にあるのかという点に留意しながら検討する。
- (3) 江戸末期の小倉城下町図（屋敷割図）により、小倉城下町の構造（居住分布や関係施設の立地など）を明らかにする。

また、同図と明治時代の2万5千分の1地形図により、各期の土地利用図を作成して、土地利用の変化という観点から、城下町がどのように解体し、再編されていくか明らかにする。

そのうえで、城下町を構成した藩士や町人が、城の自焼と藩庁の移転によってどのような変動を受けたのか、居住地や職業など人びとの生活がどのように変化し

たか検討する。

以上をふまえて、小倉の近代都市形成の特質について考える。

4. 研究成果

上記の(1)～(3)に即して整理すると次の通りである。

- (1) 勤務先である北九州市立自然史・歴史博物館が所蔵する小笠原文書や小倉藩の大庄屋を勤めた『中村平左衛門日記』『小森承之助日記』のほか、福岡県立幾徳館高等学校同窓会が所蔵する小笠原文庫（みやこ町歴史民俗博物館寄託）など小倉藩の記録資料の調査を行った。また、熊本藩細川家の永青文庫古文書（財団法人永青文庫所蔵、熊本大学附属図書館寄託）、長州藩毛利家文書（山口県立図書館所蔵）を中心に、佐賀藩・府内藩・臼杵藩・鹿児島藩などの長州戦争（小倉戦争）関係資料の調査を行った。それにより、小倉戦争における小倉藩の動向を明らかにするとともに、他藩がどのように参加したか検討した。今後は福岡藩や久留米藩など、さらに他藩の資料調査を行い、小倉戦争の「史実」について、できるだけ詳細に明らかにする必要がある。

また、東北地方に残されている戊辰戦争関係資料について、新政府軍として参戦した小倉藩の動向を示す資料の調査を行い、小倉藩の記録資料には見えない事実を知ることができた。

さらに、1854年のペリー再来航の際、小倉藩とともに警衛を担当した松代藩（真田家）の関係資料の調査を行い、小倉藩の関係資料と合わせて、その詳細を知ることができた。

- (2) 明治末年に編纂された小倉戦争の「正史」と言うべき『豊倉記事』をひもときながら、(1)の調査資料や、長州藩『防長回天史』など他藩の「正史」と照合して、戦争の情報がどのように伝達されたか、戦争の情報や体験はどのように記録されたか、戦争はどのように記憶され、語られたか検討した。幕府軍総大将の戦線離脱や諸藩の不参加によって「孤軍奮闘」となったにもかかわらず、小倉藩が一貫して幕府に忠誠を尽くし戦ったこと、小倉城の自焼がやむを得ない選択であったことを強調する語りが存在し、「敗戦」の記憶が論理的に克服されようとしたことを明らかにした。

また、東北諸藩の中で新政府軍に加わった（旧）秋田藩では、戊辰戦争はどのように「記憶」され語られたか検討し、新政府軍に転向した決断を藩の「尊皇」の表現と賛美する「語り」が存在したことを明らかにした。長州戦争は幕府軍として、戊辰戦争は新政府軍として戦った（旧）小倉藩

における戊辰戦争、さらには幕末維新期の諸事件に関わる記憶と語りについて考えるうえで興味深い。

(3).江戸末期の小倉城下町図について、屋敷割ごとにデータベース化と書き起こし図の作成を行い、住民構成と居住分布について明らかにして色分けして明示した。それによって、小倉城下町の社会構造について明らかにするとともに、小倉城の自焼と藩・藩士の離脱による城下町の破壊や、明治維新後の変化について明らかにするうえで不可欠な基礎的作業を行うことができた。

そのうえで、GISソフトを用いて、江戸末期と明治31年の土地利用図を作成して、小倉の城下町から近代都市への変化について明らかにした。

その結果、藩士の居住域は明治以降軍用地（歩兵第14聯隊や第12師団司令部、師団司令部移転後は陸軍造兵廠）を中心に大きく変容していくのに対して、町人の居住域には連続性が大きいことが判明した。今後は、明治初年の小倉のまちのありようについて、できるだけ詳細に検討するとともに、藩庁移転先における藩士の居住・生活状況について調査・研究を行う必要がある。

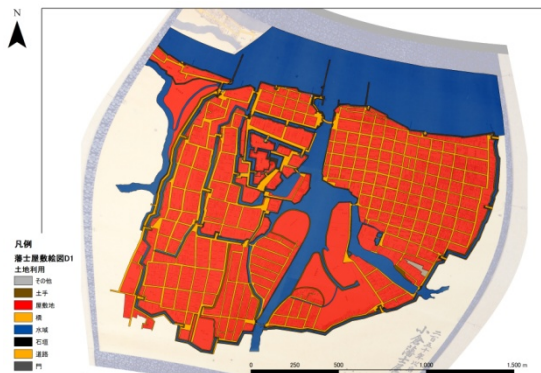
【江戸末期屋敷絵図】

紫川河口に築かれた城下町。左岸に本丸・二の丸・三の丸、その周囲に家臣の武家屋敷が広がる。海岸部と西端部には町人町が広がる。右岸には町人町と寺町が形成。その東側には下級家臣の武家屋敷がある。

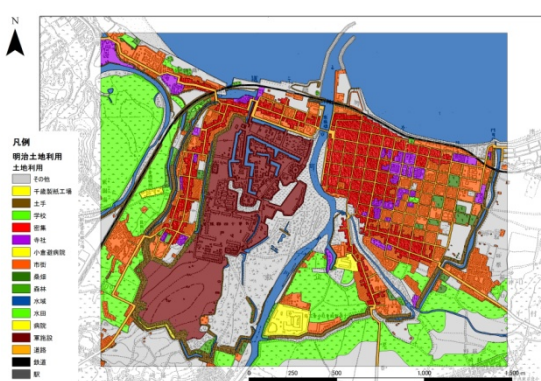


【江戸末期土地利用図】

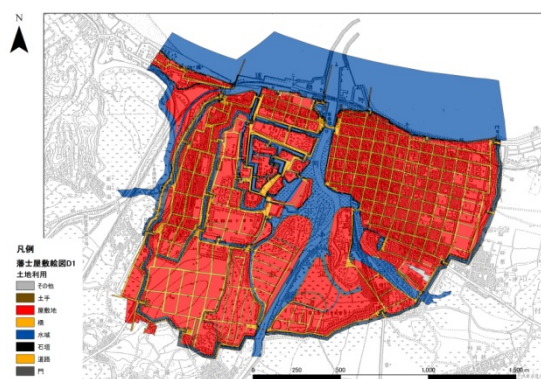
土地利用図としてはほとんどが屋敷地（宅地）となっている。



【明治31年土地利用図】



【明治31年地形図 + 江戸末期土地利用図】



【江戸末期屋敷図 + 明治31年土地利用図】



紫川左岸の本丸・二の丸・三の丸と武家屋敷は軍用地となっている。城下町から「軍都」へという小倉の変化が顕著に示されている。一方、右岸の町人地は密集地、その東側の下級家臣の武家地も市街地化が進行した。その一方で、右岸の南側は水田化している。後に工業用地となるのは、この水田地域と海岸の埋立地である。

5．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

6．研究組織

(1)研究代表者

日比野 利信 (HIBINO TOSHINOBU)
北九州市立自然史・歴史博物館・歴史課・
学芸員
研究者番号：90372234